

## R. オドーネルの「スミス価値尺度論」解釈（Ⅲ）

中 川 栄 治\*

### 序

本稿は、前二稿（中川栄治「R. オドーネルの『スミス価値尺度論』解釈」（Ⅰ）、（Ⅱ）『広島経済大学経済研究論集』第23巻第4号、2001年3月、21-38頁、第24巻第1号、2001年6月、21-37頁）にひきつづき、Rory O'Donnell, *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke & London: Macmillan, 1990——以下、前二稿におけるのと同様、O'Donnell [1990] と略記する\*\*——中に示される「アダム・スミスの価値尺度論」に関するオドーネルの所論の内容およびその特徴等を明らかにしようとするものである。

（注）

\*\* 前二稿で既出の他の諸文献の略記についても、前二稿でのそれに従う。なお、WN と略記する『国富論』は、前二稿中におけるのと同様、モダン・ライブラリー版である。また、本稿中の見出しの番号および注の番号は、前二稿からの通し番号である。

### VII スミスによる価値尺度の利用：『国富論』第1篇第11章の「余論」

オドーネルは、スミスの価値尺度について、我々が前々稿および前稿でみてきたような内容の見方を示し、さらに、これもすでにみたように、スミスの価値尺度に関連する既存の諸解釈に対する自らの見方を示すことをつうじてスミスの議論に関する自らの解釈の性格をより明らかにしようとし、またその過程で、例えば、スミスは労働生産性の上昇が相対価格に及ぼす諸効果を確認するために彼の労働支配力（生きた労働に対する支配力）尺度（および穀物尺度）を使用しようとした、との指摘もなしたわけであるが、オドーネルは事実上、スミスがそのような形で彼の労

---

\* 広島経済大学経済学部教授

働支配力尺度（および穀物尺度）を利用した箇所として『国富論』第1篇第11章の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」をみようとする。そしてオドーネルは、スミスが彼の価値尺度を利用したその「余論」でのスミスによる彼の価値尺度の利用法は、スミスの価値尺度についての自らの解釈を一層裏付けるものであるとしつつ<sup>(57)</sup>、その「余論」においてスミスが彼の価値尺度を利用することによって示そうとしていたことに関する自らの見方を提示することをつうじて、スミスの価値尺度についての自らの解釈をより確かなものとして示そうとする。

その際オドーネルはまず、そのための一つの準備として、スミスには様々な商品の諸生産方法の漸進的変化（evolution）およびその結果としてのそれら諸商品の価値の漸進的変化といったことに関する理論（theory）があったとみつつ<sup>(58)</sup>、その理論について、つぎのような内容の説明を提示しようとする<sup>(59)</sup>。すなわち、その理論においてスミスは、①穀物の価格はおよそ一定であると考えたのであるが、②野菜（vegetable）および菜園生産物（garden produce）は技術上の諸改良の一結果としてより安価（cheaper）になると考え、③もともとは野生のもので豊富に入手可能であった家畜類 live stock（畜牛 cattle、家禽 poultry、酪農生産物 dairy produce、珍しい鳥 rare birds、等々）については、各々、利潤目的で生産するに値するようになるほどにまでその価格が上昇するようになる、と考え、④金銀およびその他の貴金属の価格については、それらの金属は他のすべての商品と同じように自然価格をもつのであるがその自然価格は「改良の進展（progress of improvement）」と関連する明確な趨勢をもちあはしない、と考えたのであり、そしてその理由は、他の諸生産物の生産方法の場合とは違って、ある特定の時期に商業世界にそれらの金属を供給しうる鉱山が豊かであるか貧しいかはある特定の国の産業の状態とはなんの関係もない、ということであった<sup>(60)</sup>、⑤製造品については、その「真実価格（real price）」は、生産方法の改良の結果、かなり低下するであろう、と考えていた、というわけである<sup>(61)</sup>。

そしてオドーネルは、うえのような理論に基づきつつスミスが「余論」において、彼の価値尺度を利用して銀の価値の実際の推移を論じる過程で示そうとしていた事柄といったことに関連して、例えば事実上以下のような内容をもつ見方を提示しようとするのである<sup>(62)</sup>。

すなわち、①スミスは例えば、「ジュリアス・シーザーの侵入からアメリカにおける鉱山の発見にいたるまで、銀の価値は継続的に低落していた」という流布していた見解（WN, p. 181. 大河内訳〈I〉, 301頁）に対して、たしかに家畜（cattle）や家禽等々は往古の時代には非常に低い価格をもっていたのであるが、「これらが

安価であったのは、銀の価値が高かったためではなく、これらの商品自体の価値が低かったからである」(WN, p. 186. 大河内訳〈I〉, 308頁)といった形で、異議を唱えた。また、穀物の不変な真実価格 real price (および、その結果としての、穀物の貨幣価格における変化はすべて、銀の真実価格における変化を反映するという考え<sup>(67)</sup>) および家畜、家禽等々の真実価格の趨勢についての上の見方に基づきつつ、彼の時代における銀価値の動向に関して流布していた見解に異議を唱えて銀の価値は上昇しつつあると主張し、そして、穀物の貨幣価格における観察された低下はすべて、このデフレーション(銀・貨幣価値の上昇)に起因しているのであって、穀物輸出奨励金——彼の見解では、これは、穀物価格を上昇させる傾向をもつものであった——の結果というわけではない、とした<sup>(68)</sup>のである<sup>(69)</sup>。

②また、スミスは、諸価格について情報を収集してきたほとんどの著述家は金銀の高価値を、「それらの金属の稀少性の」証拠として「だけでなく、そうした事態の生じたときにその国が貧困で野蛮であったことの」証拠と「も」みなしているようである、ということを描き、さらに、「こういう考えは、国民の富(national wealth)とは金銀の豊富さにあり、国民の貧困(national poverty)はこれらの不足にあると主張する政治経済学の体系と関係がある」、と付言する(WN, pp. 237-238. 大河内訳〈I〉, 385頁)。そしてそれに対しスミスは、銀の真実価格〔労働支配力・穀物支配力のタームでの銀の価格、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀の相対価値・相対価格〕は事実上一貫性のないまちまちのものであって(このスミスの見解は、様々な商品の諸生産方法の漸進的変化およびその結果としてのそれら諸商品の価値(相対価値・相対価格)の漸進的変化といったことに関する、前でみた「理論」に基づく)、銀価値〔真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀の相対価値・相対価格〕の実際の歴史は一つの残余的なもの(residual)として説明されうるということから<sup>(70)</sup>、うえのような、事実上銀価値を一経済の発展段階の指標(indicator)とする考えを退け、そして、例えば、「しかし財貨一般、あるいはとくに穀物の貨幣価格が低いということは、その時代の貧困と野蛮の証拠にはならないとしても、ある特定の種類の商品、例えば家畜(cattle)、家禽、すべての種類の狩猟の獲物(game of all kinds)などの貨幣価格が、穀物の貨幣価格に対する割合において低いということは、そのことの最も決定的な証拠である」(WN, p. 239. 大河内訳〈I〉, 387頁)と述べるといったように、スミスは、銀とは別の諸商品の諸真実価格〔労働支配力・穀物支配力タームでの諸商品の諸真実価格、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された諸

商品の諸相対価値・諸相対価格]を、経済の発展段階についての指標としようとしていたのである<sup>(72)</sup>。

③なお、スミスの議論において上のように諸真実価格が経済の発展段階についての指標を提供しうるのは、穀物が不変の真実価格〔不変の労働支配力〕を持つとともに他の諸財貨の諸真実価格〔労働支配力・穀物支配力〕は経済発展 (economic development) の進行につれて予測可能な道筋で漸進的に変化するというに拠っていたのであり、またその間の事情は、経済発展の進行につれて穀物、家畜 (cattle)、製造品の労働支配力価値 (labour command value) がどのように動くかを示す図-1によって視覚化することもできるのであるが、スミスの方法は、ある所与の時点、ある所与の国における、穀物に対する家畜および製造品の相対的価格を観察して、そこから、その国がどのような発展段階にあるかを推測する、というものであったのである<sup>(74)</sup>。

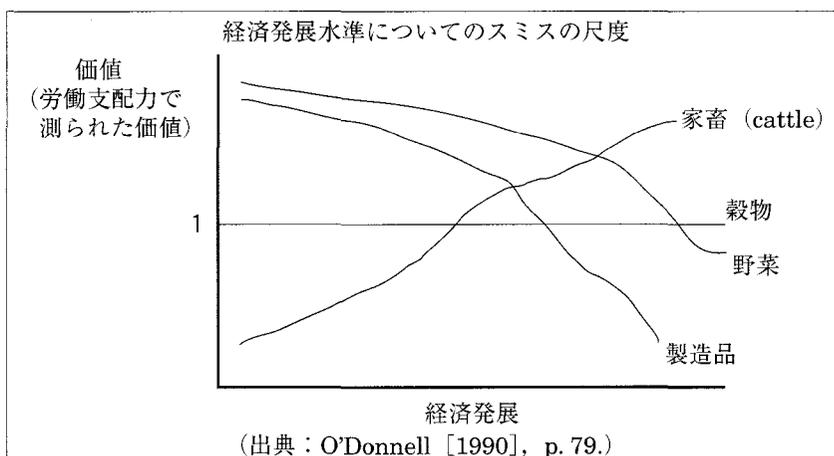


図-1

④うえのような意味で、スミスの労働支配力尺度あるいは穀物尺度は、経済発展の一尺度たることが意図されていたのである (ただしまた、産出高 output の、あるいは購買力 purchasing power の一尺度たることが意図されていたわけではない)。それらは、価値〔交換価値・相対価値としての価値、相対価格〕の一尺度であったのであるが、それを基礎づけている諸仮定を所与とし、さらにまた、価値の変動における生産方法の諸変化ということにスミスが割り当てている役割および各商品の価値の漸進的変化についてのスミスの理論を所与とすれば、それらは、経済発展の尺度として役立つものであったわけである<sup>(75)</sup>。

⑤なおまた、スミス自身の経済発展理論そのものは、分業と資本蓄積に基づくも

のであり、そこでは金銀の、量ならびに価値〔交換価値・相対価値としての価値、相対価格〕といったことは取るに足らない役割しか演じないのであるが、スミスはそのようなものとしての彼の発展理論を弁護しようとしていたのであって、そのような脈絡でスミスは、彼の発展理論が様々な生産方法の発展（およびそれに付随する、諸価格〔諸相対価格、諸交換価値・諸相対価値〕の諸変化）を説明しうることを示そうとするとともに、銀の、量ならびに価値といったことは、彼の発展理論中に含まれる持続的諸力によって発展パターンが決定されてしまった後の、一つの残余的な要素（residual element）であるということを示そうとしたのである。例えば、スミスは、改良の前進の過程で銀の生産費は上昇するかもしれない下がるかもしれない〔したがってまた、労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀の相対価値・相対価格としての銀の価値は、上昇するかもしれない下がるかもしれない〕ということの説明したうえで、「こうした二つの出来事のうちのどちらが起ころうと、それは世界の富と繁栄にとって、つまり人類の土地と労働の年々の生産物の真実価値にとって、ほとんど重要性をもたない」（WN, p. 237. 大河内訳〈I〉, 384頁）と述べたのである。<sup>(56)</sup>

⑥もちろん、実際、（アメリカにおける豊富な鉱山の発見の一結果として）金銀の生産費におけるめざましい低下が存在したのであるが、スミスはこのことの意味を、「余論の結び」中で、「ヨーロッパにおける金銀の量の増大と製造業や農業の増進とは、ほぼ同じ時期に起こったものではあるが、きわめて異なる原因から生じ、相互にほとんどなんの自然的関連のない二つの出来事なのである」（WN, p. 238. 大河内訳〈I〉, 386頁）、と評価した。こういった重要な結論の依拠する基礎となっていたものが、経済発展そして様々な生産方法の漸進的変化についての（さらに諸相対価格〔諸交換価値・諸相対価値としての諸価値〕へのこれらのものの影響についての）スミスの理論であったのであり、そして、（彼の非常に特殊な諸仮定に基づく）彼の労働支配力尺度は、その理論を効果的に表現するために彼が使用した道具（instrument）であったのである。<sup>(57)</sup>

（注）

(57) O'Donnell [1990], p. 76 参照。

(58) O'Donnell [1990], p. 76 参照。

(59) 以下は、O'Donnell [1990], p. 76 に基づく。

(60) オドナーネルは、そのような考えが示されている箇所として、『国富論』第1篇第11章の「余論」中「銀の価値の変動に関する余論の結び」第10パラグラフ（WN, pp. 241-242. 大河内訳〈I〉, 391-392頁）および第1篇第8章第35パラグラフ（WN, p. 78. 大河内訳〈I〉, 132-133頁）をあげる。

- (61) オドーネルは、そのような考えが示されている箇所として、同じく「余論」中の「第二の種類」第1パラグラフ (WN, pp. 219–220. 大河内訳〈I〉, 355–356頁) をあげる。また、オドーネルによれば、同一の理由からスミスは、羊毛や獣皮 (hides) は羊の肉 (mutton) や牛肉の結合生産物であるゆえ羊毛や獣皮についてはその価格は上昇する傾向があるが、そうでない場合もありうると考えた、とされる。そして、そのような考えが示されている箇所として、同じく「余論」中の「第三の種類」第1パラグラフ (WN, p. 228. 大河内訳〈I〉, 370–371頁) があげられる。(O'Donnell [1990], p. 241 n. 21 参照。)
- (62) オドーネルは、そのような考えが示されている箇所として、『国富論』第1篇第11章第3節第4–第7パラグラフ (WN, p. 176. 大河内訳〈I〉, 293頁) をあげる。
- (63) オドーネルは、そのような考えが示されている箇所として、「余論」中の「第三の種類」第21パラグラフ (WN, pp. 236–237. 大河内訳〈I〉, 383–385頁) をあげる。
- (64) オドーネルは、そのような考えが示されている箇所として、『国富論』第1篇第11章の「改良の進歩が製造品の真実価格に及ぼす効果」第1パラグラフ (WN, pp. 242–243. 大河内訳〈I〉, 393頁) をあげる。
- (65) なお、以上のようなものとしてのオドーネルの見方そのものは、つぎのようなものとして捉え直すこともできよう。すなわち、スミスは資本主義経済での「商品の交換価値 (相対価値) の真の尺度」を、労働支配力 (生きた労働に対する支配力)、さらにまた、穀物支配力に求めたのであり、そこでは、各々の商品の真の価値 (真の、交換価値・相対価値としての価値) の大きさは、各々の商品の労働支配力の大きさあるいはまた各々の商品の穀物支配力の大きさによって表示される、言い換えれば、各々の商品の相対価格の大きさを表示する共通の単位として、各々の商品が支配しうる労働あるいはさらに穀物が使用されるのであり、また、その労働支配力尺度および穀物尺度は、各々の商品の生産方法の変化 (生産条件の変化、技術変化) による各々の商品の価値 (相対価値・相対価格) の変化を確定しうる形で各々の商品の価値 (相対価値・相対価格) の大きさを表示しうる尺度として構想されていたのであるが、そのような尺度を使用するスミスには、様々な商品の諸生産方法の漸進的变化およびその結果としてのそれら諸商品の価値 (相対価値・相対価格) の漸進的变化といったことに関する理論があった。そしてその理論においては、①労働支配力タームでその大きさが表示された穀物の価値 (相対価値・相対価格) は経時的にはほぼ一定となり (労働支配力の代理物としての穀物支配力)、②野菜・菜園生産物の価値 (労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された野菜・菜園生産物の相対価値・相対価格) は、技術改良の結果、低下することとなり、③家畜類 (畜牛、家禽、酪農生産物、珍しい鳥、等々) の価値 (労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された家畜類の相対価値・相対価格) は、利潤目的で生産するに値するようになるほどにまで上昇することとなり、④金銀およびその他の貴金属の場合には、他の諸商品の場合と違って、ある特定の時期に商業世界にそれらの金属を供給しうる鉱山が豊かであるか貧しいか (それらの金属の生産条件) は、特定の国の産業の状態とはなんの関係もないがゆえに、それらの金属の価値 (労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示されたそれらの金属の相対価値・相対価格) は、「改良の進展」と相関する明確な趨勢をもたない、ということとなり、⑤製造品の価値 (労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された製造品の相対価値・相対価格) は、生産方法の改良の結果、かなり低下することとなる、というわけである。
- (66) なお、オドーネルによれば、その「余論」自体は、銀の価値 (交換価値・相対価値としての価値、相対価格) の実際の推移を確定しようとするものであったのであり、そしてス

ミスの見解では銀の価値の推移は事実上一貫性のないまちまちのもの(random)であったということになるのであるが、スミスの場合、彼には社会システムの生産的潜在能力の発展についてのア・プリオリな理論があった——またそれをもとにした様々な相対価格(相対価値としての価値)の漸進的変化についてのア・プリオリな理論があった——のであって、スミスはそのような意味での、諸商品の諸生産方法の漸進的変化およびその結果としてのそれら諸商品の価値(相対価値・相対価格)の漸進的変化についての上でみた理論に基づきつつ、そして彼の価値尺度を利用しつつ、「余論」での議論を展開した、とみられる。その点の詳細については、O'Donnell [1990], pp. 76-77 を見よ。

67) なお、前稿の、「V 数字例」のつづき中でみたように、オドナーは、ここでの議論に先立つ「穀物」に関する数字例の議論の脈絡のなかで、スミスの議論における、(利潤率所与のもとでの)穀物生産費一定、それによる穀物の貨幣価格一定、さらに、貨幣価値に変化があるときにのみ生じうる穀物の貨幣価格の変化、といった事情への言及をなしていたのであった。

68) オドナーは、スミスがそのような見解を示している箇所として、「余論」の「第三期」中、第3-第5パラグラフ(WN, pp. 192-194. 大河内訳〈I〉, 318-320頁)、第10パラグラフ(WN, pp. 196-197. 大河内訳〈I〉, 323-324頁)、第17パラグラフ(WN, pp. 198-199. 大河内訳〈I〉, 326-327頁)をあげる。

69) 以上、①の詳細については、O'Donnell [1990], pp. 77-78 を見よ。なお、いま本文でみたようなものとしてのオドナーの見方そのものは、つぎのようなものとして捉え直すこともできるであろう。すなわち、「ジュリアス・シーザーの侵入からアメリカにおける鉱山の発見にいたるまで、銀の価値は継続的に低落していた」(それとの対応で、その期間に、家畜や家禽等々の貨幣価格が継続的に上昇していた)という見解について、スミスは事実上、往古の時代に家畜や家禽等々の貨幣価格が非常に低かったのは、銀の価値(真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示されたものとしての銀・貨幣の相対価値・相対価格)が高かったからではなくて、家畜・家禽等々の価値(労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示されたものとしての家畜・家禽等々の相対価値・相対価格)が低かったからであるとして、うえのような見解に対して異議を唱えた。またスミスは、穀物の不変な真実価格(つまり、真の価値尺度としての労働支配力のタームでその大きさが表示された穀物の不変な相対価値・相対価格)——また、その結果としての、穀物の貨幣価格における変化はすべて、銀の真実価格における変化(つまり、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀・貨幣の相対価値・相対価格における変化)を反映するという考え——および家畜・家禽等々の真実価格の趨勢(つまり、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された家畜・家禽等々の相対価値・相対価格の趨勢)についての前の理論中でみた見方に基づきつつ、彼の時代における銀価値の動向に関して流布していた見解に異議を唱えて、銀の価値(つまり、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀・貨幣の相対価値・相対価格)は上昇しつつあると主張し、そして、穀物の貨幣価格(銀・貨幣支配力のタームでの穀物の価格)における観察された低下はすべて、(銀の側での事情変化による)銀価値の上昇(つまり、真の価値尺度としての労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀・貨幣の相対価値・相対価格の上昇)に起因しているのであって、穀物輸出奨励金(それによる耕作の奨励をつうじての穀物生産における事情変化)の結果というわけではない、とした——彼の見解では、穀物輸出奨励金は、(他の経路をつうじて)穀物の貨幣価格を上昇さ

せる傾向をもつものであった——，というわけである。

- (70) この点については、すぐあとの⑤、⑥も見よ。
- (71) オドーネルは、スミスがそのような考えを退けている箇所として、「余論」の「銀の価値の変動に関する余論の結び」第2パラグラフ(WN, p. 239. 大河内訳〈I〉, 387頁)をあげる。
- (72) 以上②については O'Donnell [1990], p. 78 参照。なお、オドーネルは、一方で、「短期」と「長期」との間だけでなく「長期」と「発展段階」(もしくは「状態」)の間にも区別をなすスミスの議論においては、一「発展段階」内では生産方法は変化しうるが、賃金、利潤、地代(の率)は一定、穀物賃金は一定で、「発展段階」の移行に際してのみ賃金、利潤、地代(の率)は変化しうる、穀物賃金は変化しうる、ということになっている、とみるとともに、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際には、そこでの基本的特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであった、とみる、ということはお前々稿注(40)中で触れたとおり。
- (73) なお、その図-1では、縦軸に労働支配力で測られた価値(労働支配力で測られた交換価値・相対価値としての価値、真実価格)、横軸に経済発展水準がとられ、そして、労働支配力で測られた穀物の価値(労働支配力のタームで表示された穀物の相対価値、真実価格)が、すべての経済発展水準をつうじて1として示され、また、経済発展の進行につれて家畜のそれは上昇し、野菜のそれは低下、製造品のそれはさらに低下するものとして、示されているわけである。
- (74) O'Donnell [1990], pp. 78-79 参照。なお、ここでみたようなものとしてのオドーネルの見方そのものは、つぎのようなものとして捉え直すこともできるであろう。すなわち、前でみたように、各々の商品の生産方法の変化(生産条件の変化、技術変化)による各々の商品の価値(交換価値・相対価値、相対価格)の変化を確定しうる形で各々の商品の価値(相対価値、相対価格)の大きさを表示しうる尺度として労働支配力尺度さらに穀物尺度を構想・使用するスミスにはまた、様々な商品の諸生産方法の漸進的变化およびその結果としてのそれら諸商品の価値(相対価値、相対価格)の漸進的变化といったことに関する「理論」があったのであり、そしてその理論によれば、労働支配力タームでその大きさが表示された穀物の価値(労働支配力で測られた穀物の相対価値、労働支配力で測られた相対価格としての穀物の真実価格)は経時的にはほぼ一定(労働支配力の代理物としての穀物支配力)、野菜・菜園生産物(図-1では「野菜」)のそれは、技術改良の結果、低下の傾向をもち、家畜類(図-1では「家畜」)のそれは、上昇傾向をもち、製造品のそれは、生産方法の改良の結果、かなり低下する傾向をもつ、ということになるのであったが、スミスはそのような関係から、一経済における上のような諸商品の、労働支配力ターム(あるいはまた穀物支配力ターム)でその大きさが示された相対価格としての真実価格の推移・労働支配力ターム(あるいはまた穀物支配力ターム)でその大きさが示された相対価値としての価値の推移を、その経済の発展という脈絡のなかで捉えようとした。つまり、穀物の、労働支配力タームでその大きさが示された相対価格としての真実価格・労働支配力タームでその大きさが示された相対価値としての価値は、すべての経済発展水準をつうじて(ほぼ)一定(図-1では1)であるのにたいし、家畜のそれは、経済発展の進行につれて上昇、野菜のそれは低下、製造品のそれはかなり低下、という傾向をもつのであって、家畜のその上昇、野菜や製造品のその低下は、経済発展の進行を指し示すものであり、また、ある所与の時点、ある所与の国において、(ほぼ)一定の穀物の真実価格に対して家畜の真実価格、(野菜の真実価格や)製造品の真実価格がそれぞれどれほどのも

のであるか、ということ、あるいはまた、労働支配力(ほぼ)不変の穀物というタームでの、家畜の真実価格がどれほど高くなっているか、同時に、穀物タームでの(野菜の真実価格や)製造品の真実価格がどれほど低くなっているか、ということが、その国が到達している経済発展段階を指し示す、と考えようとした、というわけである。

(75) O'Donnell [1990], p. 79 参照。

(76) O'Donnell [1990], pp. 79-80 参照。

(77) O'Donnell [1990], p. 80 参照。なお、前々稿注(5)中で触れたように、ブレイドゥンは1938年の論文で、スミスが「それを獲得するための労苦と骨折り」として定義する事物の「真実価格 (real price)」とは事実上、生産性と表裏の関係にあるもの(そして、概念的には、交換価値としての価値とは別のもの)であったのであって、スミスは事物のその「真実価格」の経時的変化の測定ということによって事実上、当該事物の生産における生産性の経時的変化の測定といったことを考えようとしていたのであり、『国富論』第1篇第5章でスミスが「労働に対する支配力」指標等を論じた際の主要関心事はそのようなものとしての生産性の経時的変化の測定、そのための指標等ということであった、といった認識に基づきつつ議論を展開し、1974年の著書、初出1975年の論文でも、同様な認識に基づく議論を展開したわけであるが、その際ブレイドゥンはまた、例えばその1938年の論文中でつぎのような見方を示しもしていた。すなわち、スミスは第1篇第5章で展開した「真実価格」についての議論を第1篇第11章で使用したのであって、第11章の「余論」では価値という言葉が事実上、「真実価格」という言葉の同義語として使用され、そして銀の「穀物」価格('corn' price of silver, 穀物タームでの銀の価格)における諸変化が銀の「真実価格」における諸変化を測定すると考えられていたのであり、そこではスミスは一般的購買力という現代的な意味での貨幣価値といったものにおける諸変化を論じていたわけでも一つの指数問題を取り扱っていたわけでもない、とみるとともに、異なる諸商品の間での真実価格の諸変化における相違は、それらの諸商品の、諸交換価値の階層関係(hierarchy)における位置の諸変化を引き起こすであろうゆえ、この「余論」での銀あるいは家畜の真実価格についてのスミスの議論は事実上、このような意味でなぜある諸価値(ある諸交換価値・諸相対価値)が変化してきたのかという変化する諸価値についての一研究を構成することとなっている、とみる、といったものである(またブレイドゥンは、そのようなことに関連するスミスの議論を具体的に示そうとする)。(詳しくは、Bladen [1938], pp. 37-40 を、また、中川 [1995], (上), 153-154頁注(12)も、見よ。また、1974年の著書中でのブレイドゥンによる第11章(の「余論」)に関連する言及については、例えば、Bladen [1974], pp. 20-21, 25, 47-57 を、また、中川 [1995], (下), 484-485頁, 490-492頁注(18), 注(20), 注(21), 496-497頁も、見よ。初出1975年の論文中でブレイドゥンによるそれについては、例えば、Bladen [1975], p. 373 を、また、中川 [1995], (下), 535頁, 555頁も、見よ。)

また、シロスーラビーニは、1976年の論文で、例えばつぎのような見方を示しもしていた。すなわち、『国富論』第1篇第11章のなかで穀物標準は、銀の相対的稀少あるいは豊富といったことに起因する諸価格の動きを、生産の条件の変化ということに起因する諸価格の動きから区別するために使用されており、そしてそこでは、[一国経済の]「改良の前進」は一定の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を上昇させ、また他の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を低下させる、ということになっており、それゆえまた、異なった種類の諸商品のうえのようなタームでの価格の動きは一国によって到達された発展段階の一つの目安(an indication of the stage of development)とみなされ

うる、ということになっているのであり（スミスの場合には価格の理論と経済成長の理論 theory of economic growth とが絡み合っていたのである）、また、まさしく銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する価格変化というものを単独に取り出すために穀物標準が使用されている第11章中に含まれる「余論」の主要目的の一つは、ヨーロッパにおける金銀の量の増大がなんらかの道筋で経済成長を促進したという重商主義的見解を根絶することにあつたのである（なお、シロスーラビーニはこの脈絡で、「余論の結び」から、いま本分中でみたオドーネルによって言及されている部分を含むつぎのようなスミスの文言を引用していた。すなわち、「ヨーロッパにおける金銀の量の増大と製造業や農業の増進とは、ほぼ同じ時期に起こったものではあるが、きわめて異なる原因から生じ、相互にほとんどなんの自然的関連のない二つの出来事なのである。前者は単なる偶然から生じたものであつて、それにはなんの叡知も政策も関与しなかつたし、そうした関与の可能性もなかつた。後者は封建制度の崩壊から生じたものであり、産業にたいして必要な奨励だけを与える政府、すなわち産業にその労働の果実を享受させるかなりの保証を与える政府が確立したことから生じたものなのである。いまでも封建制度が依然として行われているポーランドは、今日もアメリカの発見以前と同じくらいみじめな国である。……スペインとポルトガルは鉱山をもっている国ではあるが、多分ポーランドに次いでヨーロッパで最もみじめな二つの国である。……スペインとポルトガルでは封建制度は廃止されたが、それは、もっと良い制度によってひきつがれたわけではなかつたのである」（WN, pp. 238-239. 大河内訳〈I〉, 386-387頁）、というわけである）、といった見方である。（詳しくは、Sylos-Labini [1976], pp. 210-211, p. 211n. 10, 中川 [1995], (下), 580-581頁, 599-600頁注<sup>36</sup>, 615-616頁を見よ。）

なお、うえのようなシロスーラビーニの見方そのものは、つぎのような論理のもとで示されているものとして把握することができよう。すなわち、事実上すべての商品について商品価格のうち賃金分け前の占める割合が経時的に安定的という枠組みのなかで展開されるスミスの議論では、そのような事情のゆえに、任意の一商品の支配労働量の経時的变化（支配労働タームでの任意の一商品の価格における経時的变化）は、当該商品の生産において商品1単位当たり直接的・間接的に必要とされる労働量の経時的变化（その意味での、「技術変化」、「生産条件の変化」）を反映することができ、さらに、穀物については、穀物の単位数量当たり生産に直接的・間接的に必要とされる労働量が経時的に（ほぼ）一定でもあるから、うえの論理から、穀物の単位数量当たり労働支配力も経時的に（ほぼ）一定となり、任意の一商品の穀物支配力における経時的变化（穀物タームでの任意の一商品の価格における経時的变化）は、当該商品1単位当たり労働支配力の経時的变化・当該商品の生産において商品1単位当たり直接的・間接的に必要とされる労働量の経時的变化（その意味での、「技術変化」、「生産条件の変化」）を（ほぼ）反映することができ、その意味で、「支配労働」標準、またその代用物としての「穀物」標準は、任意の一時点での各商品の価値（相対価格）を表示してその一時点での諸商品の諸価値（諸相対価格）の大きさの比較を可能にするだけでなく、各商品の生産における「技術変化」（「生産条件の変化」）の存否およびその程度を反映した形で各商品の価値（相対価格）の大きさを表示しうる標準、ということになっているのであつた（前々稿および前稿中の、シロスーラビーニの議論に関連する諸注を見よ）。またそのスミスの議論では、「技術変化」そのものは、当該商品の生産高に直接的に影響を及ぼす当該商品への需要（スミスの言う「有効需要」）に依存するとともに（例えば、需要の増加＝市場の拡大＝生産されるべき数量の増大→分業の進行＝より効果的な生産方法の導入、等々といったように）、そのような「技術変化」は

諸生産部門の間で一様な形で生じるわけではなく、例えば、ある生産部門では、需要が増加があったとき、より効率的な生産方法が導入されて、商品1単位当たり生産の費用低下（スミスは事実上、これを、生産に直接的・間接的に必要とされる労働量の減少という形で捉えようとした）といった条件のもとで生産高の増加がなされる場合もあれば——こういったことは、製造業や幾つかの一定の諸農業生産で行きわたる——、他の生産部門では逆に、商品1単位当たり生産の費用上昇（事実上、生産に直接的・間接的に必要とされる労働量の増加）という条件においてのみ生産高の増加が可能、といったこともある、等々といったように、技術変化の方向またその程度そのものは諸生産部門の間で異なりうる、ということにもなっているのであった（Sylos-Labini [1976], pp. 205–206, 中川 [1995], (下), 575頁, 589頁注(7), 610頁参照。一国経済が発展するにつれて各商品に対する需要が増加し、その生産高が増加していくとすれば、ある商品については、支配労働タームあるいはまた穀物支配力タームでのその商品の価格が低下していき、またある商品については、そのようなタームでのその商品の価格は上昇していく、ということになるのである）。スミスは、うえのような考えを、『国富論』第1篇第11章中で使用しようとした。スミスは、銀の相対的稀少あるいは豊富といったことに起因する諸価格の動きに対して、穀物タームでの諸商品の諸価格における動きを置くことによって、前者の事情に起因する諸価格の動きを、生産条件の変化（「技術変化」、事実上、当該商品の生産において商品1単位当たり直接的・間接的に必要とされる労働量の変化）ということに起因する諸価格の動きから区別しようとしたのであり、そしてそこでは、一国経済の「改良の前進」（それによる、各商品の需要増大→生産増大）は、一定の諸商品の、労働もしくは穀物タームでの価格を上昇させ、また他の諸商品の、労働もしくは穀物タームでの価格を低下させる（例えば製造業や幾つかの一定の諸農業生産における諸商品についてはこのようになる）、ということになっており、それゆえまた、異なった種類の諸商品のうえのようなタームでの価格の動きは（つまり、生産高増大につれてうえのようなタームでの価格が上昇する商品の、うえのようなタームでの価格がどの程度上昇しているか、あるいはまた、生産高増大につれてうえのようなタームでの価格が低下する商品の、うえのようなタームでの価格がどの程度低下しているか・例えば、製造業や幾つかの一定の諸農業生産における諸商品の、うえのようなタームでの諸価格がどの程度低下しているか、は）、一国によって到達された発展段階の一つの目安とみなされうる、ということになっているのであり、また、生産条件の変化に起因する価格変化と、銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する価格変化とを区別するために穀物標準が使用されている第11章の「余論」の主要目的の一つは、ヨーロッパにおける金銀の量の増大がなんらかの道筋で経済成長を促進したという重商主義的見解を根絶することにあつたのである、というわけである。

なお、オドーネルの議論では「価値理論 (theory of value)」という用語は、論理的には「価値尺度 (measure of value)」とは別個なものとしての、価値の説明（価値の因果的説明）を与えるものという意味で使用され、「価値の説明の問題・価値理論の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的には別個の問題として捉えられている、という点は、前稿VIの（VI-3）中で触れたとおりであり、また、オドーネルは資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系とみていたという点は、前々稿IVの終わりで触れたとおりであるが、オドーネルによればまた、『国富論』の、第1篇第11章中の「余論」およびその他の箇所でのスミスの議論からして、賃金、利潤、地代の率が与えられるとき諸価格は生産方法によって決定 (determine) されるというのがスミスの見解であつたという点には疑いはなく、さらに、スミスはほとんど常に、分配の状態を所与として扱い、また

その結果、諸価格の諸変化を生産方法の変化に照らして説明 (explain) したということは明らかである、とされる (O'Donnell [1990], p. 111 参照。ただし、スミスは十分に厳密な分配理論 (theory of distribution) を提供しなかったがゆえに、賃金、利潤、地代という「価格の構成部分」についての彼の分析そのものは、価値の特定値を決定できる価値理論 (determinate theory of value) とはなっていない、ともみられる。それについては、例えば O'Donnell [1990], pp. 82, 110 を見よ。スミスの価値理論、分配理論に関するオドネルの所説については、O'Donnell [1990], pt. 1, chap. 6. "Value and Distribution" を見よ。なお、シロスーラビーニも、賃金、利潤、地代の自然率の変動についてのスミスの分析の性格を、スミスの価格理論 (theory of prices) ということと関連させつつ論じようとし、そして、スミスのその価格理論を、誤ったものというよりもむしろ不決定 indeterminate のもの——つまり、価格の特定値を決定できない価格理論——とみていた。それについては、Sylos-Labini [1976], pp. 203-204 を、また、中川 [1995], (下), 587-589頁注(6)も、見よ。

[以下、次稿]